
お兄ちゃんなんて、いらない！

佑川芭瑠堵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

お兄ちゃんなんて、いらない！

【Nコード】

N9042H

【作者名】

佑川芭瑠堵

【あらすじ】

今年で小学校5年生の女の子、美郷。3年前に事故で父親を無くして、今も自分のせいだと思いついでいる。今は母と二人暮らしだ。……ある、春の日。母と仲が良い男が現れて……。一人の少女が、新たな家族を迎え立ち、悩み、苦しんで……。乗り越えていく。家族愛描いた物語……。

く過去の追憶く（前書き）

新しく連載を始めました！

また、よろしくしてください

初めての方は、これからお付き合いくださいと
ありがとうございます！

く過去の追憶く

私のお父さんは……

私が小学校2年生の時に、事故で死んだ。

しかも、よりにもよって……”私の誕生日”に、だ。

私を祝おうと無理にスピードを出して……そのまま。

帰らぬ人になってしまったのだ。

私はとても、後悔した。

私が「早く帰ってきて！」って頼まなければ……。

お父さんは……死ななかつたかもしれないのにッッ！！

私は今でもその蟠^{わたかま}りが、心に残っている。

たぶん、ずっと……消えないのだろう。

それが、私の……罪であり……。

私の罰なのだろう……と。

く過去の追憶く（後書き）

序奏です。

これから物語はスタートしていきます。

1話：いつも通り朝

今日も朝が来た。

私は、まだ眠たい目を擦って起き上がる。

只今の時刻は7：20

まあ、早くも無く遅くも無く……な、時間だ。

私はいつもの日課で、お父さんの仏壇がある部屋に行く。

一本線香を取って、火をつける。

煙がもくもく……線香の独特な匂いが広がる。

……前は嫌いだった。

けれど、今はとても落ち着く。

だって、この匂いはお父さんに繋がっているから。

そう思うと、自然と親しみを覚えた。

「お父さん、おはよう！」

写真に向って合掌してから、朝の挨拶。

「今日も頑張つて、学校行って来るね！」

そう言つて、私は花瓶の水をかえに部屋を出る。

ウチは狭いアパートなので、台所を通らないと洗面所にたどり着けない。

「美郷く早く食べなさい！」

水は後でも良いんだから……」

「いいの！」

朝かえる……！」

「だったら、もう少し早く起きなさいよーまったく美郷は……」

「はいはいっ」

お母さんは今日も口うるさい。

適当に流して聞いて、洗面所で花瓶の水を捨てる。

ちゃんと、茎を切つてあげて

水分を吸いやすくしてあげる。

そうすると、花は以外に長持ちするのだ。

そして、水をかえてあげてから十円玉を数枚落とす。

これも加藤家の食卓で得た、花を長持ちさせるテクニクだ。

「よしっ、完了」

私はまた、仏壇のある部屋に行った。

「花ももう少して枯れちゃうから、今日摘んでくるね」

そうお父さんに話し掛け、また台所の部屋へ行く。

「もう、時間内から早く食べなさいよ」

「わかってるっつてー！」

そそくさ食べて、食器を水に浸す。

「じいちゃんさまでしたあー！」

「気をつけて学校にいつてらっしゃい!」

「はぁーい」

玄関を勢いよく開けて飛び出した。

私が住んでいるアパートは、とっても古びている。

その二階の205号室が私達の家だ。

二階からだけど、少し目線が高くなるので

ここからの眺めが結構、気に入っている。

「美郷おゝはよーせんと、学校遅刻してまっでえ!」

下から声がする。

いつもの関西弁。

亮兄ちゃんだ!!

「今行くー!!」

「慌てて階段から、転げ落ちんでなあー」

「落ちないよー!」

ダッダッダッダッダッダッ!

急いで降りると、凄い音がする。

壊れないと良いけど。

「おはようさん」

「亮兄ちゃんっはよー」

「ん、挨拶でけたな!

偉い子やねえ〜」

「もーっ!

子供じゃないんだから、そんなんで撫でないですよ」

いつも子供扱にする……。

まあ、年下だからしょうがないのかも知れないけど。

この人は、すいかすぢやようじ忍冬亮司。

近所に住んでいる、お兄ちゃん的存在。

小さい頃から、お世話になっている。

「じゃあないやん

美郷は俺にとって妹みたいで可愛いんやからあゝ」

「私もお兄ちゃんみたいだつては、思ってるけど……
もう、小5だよ？」

「いんや、まだまだ可愛い年やんか！」

「そ、そうですか……」

亮兄ちゃんには適わない。

たまにオタクっぽい所もあるけれど

優しいし、気さくだし……私は好きだ。

……もちろん、お兄ちゃん的存在として……だよ？

ちよつと離れた”炎帝学園”えんていがくえんの中等部に通っている。

今年で中学3年生。

ちよつと格好良いので、女子に大人気……らしい？

私はお兄ちゃんとしてしか見えないから、そういう風には思えない。

私たちは歩きながら、途中の分かれ道まで歩いた。

亮兄ちゃんは、駅で炎帝まで通っているからそこまで一緒に行っている。

今日は新学期の始まり。

途中の桜並木が綺麗に咲いている。

ちょうど満開の時期だ。

「はあゝあ」

「なんや、ため息ついて？
幸せ逃げるで？？」

「だって、学校がユウウツなんだもん」

「ええやん、小学生なんて遊びに行っているよつなもんやし」

「失礼なっ」

「小学校時代は退屈やったなあー
授業が簡単すぎて……」

「そう言つの、亮兄ちゃんだけだよ……」

私は成績が低いほうではないが

それなりには苦労して勉強している。

亮兄ちゃんは、頭が飛びぬけて良く……。

今は先取りで、高校の勉強範囲を学習しているそつな。

うらやましい。

「やから、勉強やったら

いつでも教えてやるからなあ」

「お願いします、忍冬せんせ！」

「まかせろや」

自信に満ちた笑顔で答えた。

「……というか、私がユウウツなのは

勉強でも体育でも無く……交友関係なんだけどねえ」

「なんや、まだ言われとるん？」

「あいつらシツコイなあー」

「うん、面白がってるよ……」

「俺が懲らしめたるか??」

「いいよー……」

というのは、私が学校で受けているイジメだ。

大したことは無い。

毎日線香を上げているから、線香の香りが身体にこびり付いたみたいで。

主に男子が「くせー!」とか「近寄るな!!」とか言うレベルだ。

「辛かったら、せめて俺に相談しろや、な??」

「別に辛いとかは無いけど……
うるさくって……ちょっとストレス」

「……やっぱり、そいつ等しめたる……!!」

亮兄のめがねがキラリと光る。

このときの亮兄は少し、怖い……。

握り締めている拳がプルプル震えている。

……何かやらかしそうで。

そんな話をしながら歩いていくと、すぐに駅に辿り着く。

「ほんま、大丈夫かあ？」

「平気だつて〜」

心配性だなあ〜亮兄は。

まあ、私がイライラするなんて言ったのがいけなかったのかも。

ちょっと反省。

あまり、愚痴も漏らさない様にしよう！

「美郷？……あかんで？」

俺には何でも話さな〜！」

「あ、ばれた？」

「当たり前やん！

俺はホンマに美郷のこと、思ってるんやからなあ」

「……ありがとう」

そうやって思ってくれると思うと、心強い。

でも、私はそんな亮兄だからこそ……心配はかけたくないのだ。

亮兄は何度も振り返り「大丈夫か？」なんて、言いながらも

やっと駅の中へと消えていった。

「さて、いきますか！」

頬をぱんっ！と叩いて、気合を入れる。

私は、ゆっくりと歩き出す。

2話：小学校での憂鬱

亮兄ちゃんと別れて、私は一人で学校に向かった。

実は、ちよつと不安に近い、憂鬱。
だって……。

「うわぁ〜また来た！臭いの！！」

「近づくなよー異臭女！」

ほら、また……。
男子達のがやがや。

「……ちよつとー嫌なんだけどお」

「……マジで、ガッコからいなくなれば良いのに」

女子達の聞こえるような陰口。

「……だから、行きたくないんだよ」

こんな日常茶飯事。
もうかれこれ、数年続いているイジメ。
別に何言われても気にしない私でさえ……
毎日言われ続けると、辛い。

「あつ」

「クスクス……」

「……………」

最悪だ。

机の中には、無残になったノートたち。
ああ、持って帰るのを忘れるとすぐこれだ……。
ノート代だって馬鹿にならないのになあ。

こんなに冷静に考えられるのは、もう慣れたからもある。
だって、免疫つくじやん？
何年もやられたらね。

そんなわけで、地味なイジメに堪える日々である。

* * * * *

学校がやっと終わる。

今日も何とか無事……じゃなかったけど、終わった。
身には何も起こってないのだけが、幸いだ。
ま、奴らにそんな勇氣はない。

せいぜい、陰口か、イタズラしか出来ないのだ。

「ふう……ま、収穫あったし良いか」

学校からぶら下げて持ってきたのは、給食の残り物。
いつも給食室のおばちゃんに頼んで貰って来ている。

今日は牛乳に食パン、バナナ。

……今時のヤツは残すことが多いからな。
もったいない……。

だから、私が食費を浮かす目的もあって、持ち帰っている。

私のうちは、一応お母さんが働きに出ているが
母のパートなんて、ほんの一握りのお金しかもらえない。
だから私は少しでも協力できることはしている。

今日の給食の残り物を貰ってきたりだとか
スーパーのキャベツをむいた残りカスを「ウサギのえさ」だと言っ
てもらったり。

パン屋さんのパンのミミを貰ったり……と色々、工夫している。
それで少しは節約になってると思うの。

今日は特にイライラが溜まっていた。

だってノートまでグシャグシャにされたのだ！

お金かかるじゃんか！！

こういつときは、あそこしかない。
私の憩いの場。
それは。

* * * * *

「わあ〜綺麗」

それは近くの川原だ。

ここはかなり手入れされていて、季節で色々な花々が咲いている。
今日もまた、新しい花が植え替えられたようだ。

あと、球根で植えていたチューリップもやっと花を咲かせていた。

「あ、ちようちよ!」

ちようちよも花々に誘われて来ていた。

これを見ると春! っで感じて良いよね。

その他も春の訪れを知らせていた。

ぽかぽかした陽気で、太陽の光が降りそそぎ

その光を受けて川がきらきらを輝いている。

魚たちも気持ちよさそうに泳いでいる。

こんな自然に囲まれると、私の心は晴れる。

どんなに苦しくても、ここだけは私のよりどころ。

ここにくれば、明日も頑張れる！
そんな気がしてくるのだ。

しばらく、花壇に腰掛けていた。

私の気分が安らぐまで……。

3話：知らない靴

10分くらい川原に居たかな？

気分転換になつたし、もう日が沈みそうなので帰ることにした。

私の家は、川原から数分くらいだ。

まだお母さんは帰っていないはずなので、ゆっくり歩いて帰った。

いつものように、ギシギシ言う階段を上ってドアノブに手をかけた。すると、空いてないはずのドアが開いてしまう。

「あれ？お母さん帰ってきてたのかな？？」

まだ仕事のハズなんだけど。

そう思って、靴を脱いだらお母さんの靴があった。

なんだ帰ってきてるのかと思つたら

知らない靴もそこにあつた。

見た目からして、男の人の靴だ。

保険会社の人かな？

私はそう思って、静かに自分の部屋に行こうとした。

客間にしている部屋から、声が漏れていた。

「美夏さん、私は本気で言っているんです！」

男の人の声の大きな声が聞こえた。

なんだか必死でお母さんに言っている。

しかも……名前呼びだ。

知り合いの人かな？

「貴彦さん、でも私……」

「旦那さんのこと？それとも美郷ちゃん??」

何で私とお父さん……?」

「恒宏さんの事はふんぎりが付いてるわ

けれど、美郷は賛成してくれないわよ……再婚だなんて」

え、再婚……うそでしょ……?」

ここに居る人とお母さんがっ!」?

「美夏さんを含め、僕は美郷ちゃんのためのサポートもしてあげれます!

その方が美郷ちゃんのためにもっ……」

「……聞いて、貴彦さん

美郷はね……お父さんが何より好きだったの……

だから、新しいお父さんだなんて認めないと思っわ」

「じゃあ、美夏さんの気持ちはどうなんです?

僕の事はお嫌いですか??」

「……好きですよ

恒宏さんには悪いけれども」

「では、美郷ちゃんにそう言えば……」

「あの子に無理させたくないのッ

今だつて苦勞をかせさせたから、楽にしてあげたい！
でもあの子はそれで喜ぶかしら？

あの子はまだお父さんを忘れられてない
それで、新しいお父さんでいいわね？なんて私にはいえない……」

お母さん……。

「そろそろ、あの子が帰ってきます
帰ってください、社長？」

「今、貴方は僕に社長としか求めてないんですね？」

「そうです、すみません……」

「わかりました
無理を言つてすみませんでした」

駄目……駄目だよッ！
私だつて……お母さんが。

「待つてよ、お母さん！」

「み、美郷！？」

「美郷ちゃん……?!」

お母さんと貴彦さん？は、真剣に話していたので
まったく私の存在に気づいていなかったようで、かなり驚いている。
私も見つからないように立ち聞きしてたんだけどね……。

「ごめん、聞いてた」

「あ、あはは……そうなの？」

「でも、この話しはもう終わったから大丈夫よ！」

「お母さん、私ね……」

「確かにお父さんの事はまだ忘れられてない
でも、もう……良いやと思うの」

「美郷？良いのよ、無理しなくて……」

「無理じゃないよ？」

「だって、完全に忘れる訳じゃない
心の奥にしまおうって思うんだあー」

「……だから、お母さん」

私は、一息置いて

落ち着いてから話し出した。

「再婚しても良いよ……？」

「こう言うのが精一杯だった。
今の私には。」

3話：知らない靴（後書き）

執筆遅くなりましたっ
すいませんです

今後もお楽しみに

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9042h/>

お兄ちゃんなんて、いらない！

2010年10月11日02時28分発行